

# 「科学」と「未開」の相補性について

— H・D・ソロウ論 —

時 松 賢 二

相補性というのは、それにかかわる二つの背反する観点が、どちらも誤りではないが、その一つだけを武器として前進すると不都合な事が起るので、双方が互いの不足を補いつつ完全なものに仕上げようとする思考様式である。すなわち、その二つの観点は不完全さや欠点を含んでいるのだが、それだからだといって全く相手方を放逐してしまいうのではなく、お互いの不完全さ、欠点を相補いながら統合するというのが相補性という言葉の意味である。

科学は未開に対して次のように攻撃する。科学がこれまでに人類にもたらした莫大な恩恵を少しは考えてみるがいい、科学のないところには、あの不潔な、あさましい野蛮な状態が残るだけだ、と。一方、未開の方は科学に対して、科学の種々の悪用（たとえば、核兵器の生産だとか）を盾に取りながら、科学文明の増大する弊害を指摘し、人間性の豊かな未開の暮らしの方が人々にとって、どれだけ幸福かわからない、と攻撃する。このように、科学と未開がお互いの弱点を攻撃し合うのではなく、それらを相補的な形で、力動的に統合しようとするのが「科学」と「未開」の相補性であり、これをH・D・ソロウの主著『ウォールデン』の中に探ることによって、彼の考える、あるべき文明人の姿を浮きぼりにしようというのが本稿のねらいである。

## (1)

ソロウが生きた十九世紀中葉は科学万能主義の時代であった。つまり、その時代のアメリカは科学的精神の産物である種々の発明、発見に裏づけられた改良主義の時代であった。各方面にわたる改良・改善は科学の有益性をことさら鼓舞し、科学の進歩は人類の輝かしい未来を約束しているかのようにみえた。

このような時代精神のさなかにありながら、ソロウはその科学主義を痛烈に批判してみせる。

As with our colleges, so with a hundred “modern improvements;” there is an illusion about them; there is not always a positive advance. The devil goes on exacting compound interest to the last for his early share and numerous succeeding investments in them. Our inventions are wont to be pretty toys, which distract our attention from serious things.<sup>1</sup>

「大学についていえる事とちょうど同じような事が多数の「近代的改善」についてもいえる。それらについては幻想がある。いつも明確な進歩があるとはかぎらないからである。悪魔が彼の最初の出資株と、それに続く数多くの投資に対して、とことんまで複利を

無理取りし続ける。いろいろな発明はわれわれの注意を真面目な事からそらす、すてきなおもちゃであるのを常とする。」

ソロウの批判の根拠は当代の「改善」には「悪魔」が宿っており、これが利益・利潤の追求にやっきとなっているということである。

このような「悪魔」は科学の社会的応用である会社・工場組織に顕著であるとソロウは断じている。

I cannot believe that our factory system is the best mode by which men may get clothing. The condition of the operatives is becoming every day more like that of the English; and it cannot be wondered at, since, as far as I have heard or observed, the principal object is, not that mankind may be well and honestly clad, but, unquestionably, that the corporations may be enriched.<sup>2</sup>

「私はわが国の工場制度が人々がそれによって衣類を得ることのできる最善の方法であるとは信じられない。工員たちの状況は日ごとに英国のそれに一層似てきている。それも不思議であるはずがない。なぜならば、私が聞いたり、観察してきたかぎりにおいては、その主目的は人間がよく、そして誠実に衣類をまとえるようにすることではなくて、疑いなく、会社を富ませることであるから。」

アメリカにおいて、最初の能率的会社・工場組織——そして、それが資本主義の母体となる——が出現したのは、ソロウの生きた十九世紀中葉であった。人類の進歩の概念を一方で謳いつつ、その隠れた「主目的」は利潤の追求であるという資本主義の論理を彼は当初から看破していたようだ。

文明が行き詰まりをみせている現在でこそ、科学がもたらした諸悪を非難することは容易であるが、科学の有益性が一世を風びしたこの時代に、ソロウのように科学に異議を唱えることは至難のわざであったにちがいない。

ソロウの科学に対する批判の当然の結果として現われているのは未開への共鳴である。

*And if the civilized man's pursuits are no worthier than the savage's, if he is employed the greater part of his life in obtaining gross necessities and comforts merely, why should he have a better dwelling than the former ?<sup>3</sup>*

[Italics in the original.]

「そして、もし文明人の営みが未開人のそれよりも価値のあるものではないならば、すなわちもし文明人が生涯の大部分を単に低級な必需品と安楽を得ることに費しているのであれば、どうして文明人が未開人よりよい住まいを持たなければならないだろうか？」

(傍点原著者)

ここにおいて、ソロウは文明人と未開人を対立させている（そして、明らかに未開人を文明人より、むしろ優位に考えている）が、これはそのまま「科学」と「未開」の対立につながる。なぜならば、文明をつくったのは科学あるいは科学的精神であり、われわれが「文明」という時、それは科学文明をさしているからである。

以下の行においても、「科学」と「未開」、すなわち文明人と未開人を対立させている。

Contrast the physical condition of the Irish with that of the North American Indian, or the South Sea Islander, or any other savage race before it was degraded by contact with the civilized man. Yet I have no doubt that that people's

rulers are as wise as the average of civilized rulers. Their condition only proves what squalidness may consist with civilization.<sup>4</sup>

「アイルランド人の物質的狀態を北米のインディアン、あるいは南洋諸島人、あるいは文明人との接触によって墮落する前の他のどの未開民族のそれと対比して見たまえ。しかし、私はあの国民の統治者たちが文明国の統治者たちの平均と同じくらい賢明であることを疑わない。彼等の状態はどんな不潔さが文明と共存しうるかを証明するにすぎない。」  
このように、ソォロウは未開人は文明人との接触によって進歩したどころか墮落したということを行っているのを始めとして、文明よりも未開を優位に考えているということに注目しなければならない。

## (2)

われわれは(1)で次の二点を学んだ。(i)ソォロウは文明人と未開人を対立させている。これらの対立物の統合が「科学」と「未開」の相補性であるから、本稿の下地が得られたということになる。(ii)ソォロウは未開性を科学より、むしろ優位においている。

(ii)の見方は一つの重要なパラドックスを生じさせる。それは未開を科学よりも優位においたとしても、われわれは文明人である以外はあり得ないということ、つまり科学の悪の面があるからといって、すぐさま科学を完全に放棄し、未開人になるということは不可能であるということである。また、正しい方向とも思えない。言うなれば、文明あるいは科学の枠内にいつつ、なおかつ科学よりも未開をより優位におかなければならないというパラドックスの上に立たされるといえる。このパラドックスの意味することを簡単に言うと、文明人に未開人性を兼ね合わせ、後者をより重視するということになる。

文明性と未開性の兼ね合わせの必要性について、ソォロウはこう述べている。

Is it impossible to combine the hardiness of these savages with the intellectuality of the civilized man ?<sup>5</sup>

「これら未開人のがん丈さと文明人の知性を結びつけることは不可能だろうか？」  
この中の「結びつける」という言葉は相補性という言葉の具体的説明となっている。「文明人の知性」とは科学もしくは科学的知性にほかならないから、「文明人の知性」と未開性を「結びつける」ことは、われわれが考察している「科学」と「未開」の相補性であるといつてさしつかえなからう。

「文明人の知性」と未開性を結びつけた人物を、拙論においては、「野性的人間」(a wild man)と一応仮定することにする。つまり、「文明人の知性」(科学)と未開(savageness)の相補的統合として「野性」(wildness)を仮定するのである。(もちろん、ソォロウ自身が“savage”や“wild”といった類似した語句を、いつも明確に区別して使っているわけではない。)<sup>6</sup>

これから先の(2)の論述は、「文明人の知性」プラス未開性(savageness)が“wildness”(「野性」)だとする立論の立場から、ソォロウの言う「野性的人々」(あるべき文明人)の特質を、特に「知性」ということに関連して、明らかにすることに当ててみたい。

ソォロウは「発明や工業技術」すなわち科学、がもたらす便宜は受け入れた方がよいという。彼は科学を真っ向から否定しているのではないのである。

Though we are not so degenerate but that we might possibly live in a cave or a wigwam or wear skins to-day, it certainly is better to accept the advantages, though so dearly bought, which the invention and industry of mankind offer. In such a neighborhood as this, boards and shingles, lime and bricks, are cheaper and more easily obtained than suitable caves, or whole logs, or bark in sufficient quantities, or even well-tempered clay or flat stones. I speak understandingly on this subject, for I have made myself acquainted with it both theoretically and practically. With a little more wit we might use these materials so as to become richer than the richest now are, and make our civilization a blessing. The civilized man is a more experienced and wiser savage.<sup>7</sup>

「われわれは今日どうしても、洞穴やテント小屋に住めないほど、あるいは獣皮の着物を身にまとえないほど退化しているのではないけれども、人類の発明と工業技術が提供する便宜——それは非常に高くつくものではあるが——は受け入れた方が確かによからう。ここあたりのような近辺においては、板や屋根板、石灰やれんがなどは格好の洞穴、そっくりそのままの丸太、十分な量の樹皮、あるいは練り加減のよい粘土や平らな石などさえより安価であり、手にはいりやすい。私はこの問題に関して会得して話す。というのは、その事を理論的にも実際的にも熟知してしまっているからである。もうちょっと気をきかせれば、われわれは現在最も富んでいる者より富み、われわれの文明を祝福あるものにするように、これらの材量を用いることができるであろう。文明人とはより経験をつんだ、より賢い未開人である。」

「文明人とはより経験をつんだ、より賢い未開人」とある。「野性的人間」が「文明人の知性」と未開人を合わせた人間、いわば知性的未開人であることを考えれば、「より経験をつんだ、より賢い未開人」とは「野性的人間」のことであるといえるだろう。そうすると、「文明人の知性」のところが「より経験をつんだ、より賢い（“a more experienced and wiser”）」に当るから、「野性的人間」の知性というものは、経験（experience）と知恵（wisdom）に密着した知性だということがわかる。（このことは(1)であげた重要事項——ソロロウは科学よりも未開を優位におくということ——と一致する。）「野性的人間」とは経験的知識、すなわち知恵を体得した人間のことであり、ソロロウはこういう人間を「文明人」と呼び、「文明を祝福あるものにする」可能性をその中にみていると思われる。

『ウォールデン』の別な章では「野性的人々」という言葉がはっきりだされ、彼等の経験的知識への傾倒がうかがえる。

Early in the morning, while all things are crisp with frost, men come with fishing-reels and slender lunch, and let down their fine lines through the snowy field to take pickerel and perch; *wild men*, who instinctively follow other fashions and trust other authorities than their townsmen, and by their goings and comings stitch towns together in parts where else they would be ripped. They sit and eat their luncheon in stout fear-naughts on the dry oak leaves on the shore, as wise in natural lore as the citizen is in artificial. They never consulted with books, and know and can tell much less than they have done. The things which they practice are said not yet to be known.<sup>8</sup> [Italics mine.]

「朝早く、全てのものが霜でかちかちになっているうちに、釣のリールと粗末な弁当を持った人々がやって来て、カワカマスやスズキをとるために、雪の原にその細い糸をおろす。彼等は野性の人々であり、本能的に町の人々とはちがった様式に従い、また、ちがった権威を信じる。そして、彼等の往来によって町々を少しずつ縫い合わせる。彼等がそうしないなら、町々はほころびてしまうであろう。彼等は丈夫な外とうを着こんで岸辺の乾いた、オークの木の葉のうゑに坐り、弁当を食べる。都会人が人為的知識に通じているのと同じくらい自然の知識に通じている人々だ。彼等は書物を参照したことがなく、知ったりわかったりするよりずっと多く実践している。彼等が実践していることは、まだよく知られてないという。(傍等筆者)

経験的知識を上例の言葉でいうと「自然の知識」である。「自然の知識」とは自然から得られる知識のことであり、書物や既成観念などから得られる「人為的知識」とは対照をなす。「自然の知識」を重んじる「野性の人々」は「知ったりわかったりするよりずっと多く実践している。」書物を読んだり、いろいろな事を認識する以前にすでに実践しているというのである。また、「野性の人々」は「本能的に(傍点筆者)町の人々とはちがった様式に従い、また、ちがった権威を信じる」とある。この中の「本能的に」(“instinctively”)の意味あいはい、直観(感性)的に(intuitively)のことだと考えられる。(“instinctively”と“intuitively”は同義である。)直感や感性は、今「野性」の特徴としてあげた経験や実践と不可分に結びついている。「野性的人々」は自然に対する直感的洞察から知識を得るが、これは自然に対して経験的に、実践的に(practically)関係することによってのみ可能だからである。以上をもって、ここでは「野性」の特質として経験、実践、直感ないしは感性をあげることができよう。

「訪問者」と名づけられている章では、自然の中で生活しているカナダ人の木こり(woodchopper)の描写が数頁ある。彼は文盲であり、通常な意味においては知性的とはいえないが、ソォロゥは彼に「野性的人々」の典型をみているようだ。ソォロゥはこの木こりのような人間に「社会機構の再創造」を託しており、これは明らかに前にみた「より経験を つんだ、より賢い未開人」の「文明を祝福あるものにする」仕事と一致する。

There was a certain positive originality, however slight, to be detected in him, and I occasionally observed that he was thinking for himself and expressing his own opinion, a phenomenon so rare that I would any day walk ten miles to observe it, and it amounted to the re-origination of many of the institutions of society.<sup>9</sup>

「彼の中には、いかにささやかであるにせよ、ある明確な独自性が看取できた。そして、私は彼が自分自身で考え、自分自身の意見を表明していることを時おり見てとった。このことは非常に稀な現象なので、私はそれを観察するためなら、十マイルの道のりをもいつでも歩こうと思った。それは多くの社会機構の再創造にまで達するものであった。」この木こりは、もっぱら自然の中で生活しているがゆゑに「人為的知識」に惑わされずにすむので、「自分自身で考え」「自分自身の意見」を表明するのである。だから、ソォロゥは彼に「明確な独自性」を感じるのであり、これは「野性的人々」の顕著な特質であるといえる。

自然に対する接近方法や観察が書かれている以下のところを読むと、「野性的人々」の姿

がさらに明瞭になる。

Fishermen, hunters, woodchoppers, and others, spending their lives in the fields and woods, in a peculiar sense a part of Nature themselves are often in a more favorable mood for observing her, in the intervals of their pursuits, than philosophers or poets even, who approach her with expectation. She is not afraid to exhibit herself to them. The traveller on the prairie is naturally a hunter, on the head waters of the Missouri and Columbia a trapper, and at the Falls of St. Mary a fisherman. He who is only a traveller learns things at second-hand and by the halves, and is poor authority. We are most interested when science reports what those men already know practically or instinctively, for that alone is a true *humanity*, or account of human experience. <sup>10</sup> [Italics in the original.]

「生活を野や森ですごして、特殊な意味において彼等自身自然の一部である漁夫や猟師や木こりなどは、期待を持って自然に接近する哲学者あるいは詩人でさえよりも、仕事の合い間に自然を観察するのに、しばしばより有利な気分にある。自然は彼等に自分自身を見せることを恐れない。大草原の旅行者はしぜん、と、猟師であり、ミズーリ川とコロンビア川の上流では、わなをかける人であり、セント・メアリーの滝では、釣り人である。ただ単に旅行者であるだけの人は物事を間接的に、また中途半端に知り、権威が乏しい。われわれはそういう人々がすでに実践的に、本能的に知っていることを科学が伝える時に最も興味を示す。というのは、そのみが真に人間的なもの、すなわち人間的経験の事からであるからである。」(傍点原著者)

「期待を持って自然に接近する」ことは自然を観察するのに具合が悪い、とある。この「期待」(観念もしくは「人為的知識」のことであろう)のために、ありのままの、じかの自然から敏感な反応が不可能になるからである。「期待」が間にあるから、自然との関係が直接的でなくなるのである。これは、すなわち「物事を間接的 (“at second-hand”), にまた中途半端に」知るということである。こういう風にして得られた知識は「野性的人々」の自然に対する直接的な経験からくる知識とはずいぶん違う。「われわれはそういう人々(本論の言葉でいえば、「野性的人々」)がすでに実践的に (“practically”), 本能的に (“instinctively”) 知っていることを科学が伝える時最も興味を示す」というくだり——これは前に「野性」の特質としてあげた *practice* (実践) と *instinct* (本能・直感) を確認することになる——は彼等の自然に対する実践的な、直接的な、直観的な経験が知性の原点であることを示している。こうした経験からくる知識のみが「真に人間的なもの、すなわち人間的経験の事から」であるとソォロウは主張するのである。

ソォロウは自然界に住むある野性の動物に「野性的人々」の類似をみているようだ。

The remarkably adult yet innocent expression of their open and serene eyes is very memorable. All intelligence seems reflected in them. They suggest not merely the purity of infancy, but a wisdom clarified by experience.

「その見ひらいた、落ちついた眼の驚くほど大人の、しかもなお無垢な表情はとても忘れがたい。すべての知性がそこに反映しているようである。それは幼児の純粹さだけではなく、経験によってとぎ澄まされた知恵を暗示している。」

「文明人の知性」と未開人の融合である「野性」は一つの知性である (“All intelligence

seems reflected in them.”)。しかし、その知性は科学的知性というよりも「経験によって  
とき澄まされた知恵」と呼ぶべきものであろう。

### (3)

科学の世界（文字の世界、近代的知性・理性の世界、あるいは文明ともいっていい）を、  
いたずらに矮小化してはいけない。そこには素晴らしい可能性が秘められている。しかし、  
そのことは科学の世界と根本的に異なった世界——未開の世界——の矮小化を許すというこ  
とではない。科学文明のあのような悪、弊害、不公平さ、ごう慢さは、科学が自らを絶対化  
し、未開の世界を無視し、解体してきた結果にすぎない。

この過ちを避けるには、科学と未開の両方の世界をまたにかけ、なおかつそのどちらの論  
理にも身をゆだねることなしに、主体性を保持しなければならない。そのためには、まず科  
学である近代文明に住む人間は科学を絶対化するのを止めなくてはならない。そして、すで  
に述べたように、文明人は科学の側にいるのであれば、まさにその理由によって、自らの側  
を絶対化するのではなく、未開と相対化し、なおかつ未開をより優位におくような生き方が  
必要とされる。

さきに(2)であげたような「野性」の特質は、そのような生き方を示唆している。それは自  
然とのかかわり方の問題である。人間が自然と経験的に、実践的に、直観的に、直接的に関  
係することである。これは反知性であり、われわれはこの反知性の知性を「知恵」と呼ん  
だ。

近代文明は自然との関係を解体してきた。そこには人間と自然との排他的、異質的区分が  
残った。その当然の結果として、「知恵」を失い、合理主義的知性を盲信し、そのわなにか  
かる。

「野性」の「知恵」は自然との経験的、実践的、直観的、直接的な関係を通じて、人間と  
自然とが透明に交流することから生まれる。たとえば、(2)のおわりの方ですでに示した「野  
性的の人々」をもう一度みると、

「生活を野や森ですごして、特殊な意味において彼等自身自然の一部である漁夫や猟師  
や木こりなどは、期待を持って自然に接近する哲学者あるいは詩人でさえよりも、仕事の  
合い間に自然を観察するのに、しばしば有利な気分にある。」

漁夫、猟師、木こりなどは「彼等自身特殊な意味において自然の一部」になっているいうこ  
の叙述は、認識主体（漁夫、猟師、木こりなど）がその対象（自然）と明確に区別できない  
ような交わり方をしているということを物語っている。認識主体と認識対象を完全に分離さ  
せて、思考するというような近代科学理論的な思考法を許さないほど、主体が対象と相互に  
関係し、交錯している。自然が人間であるかのように、また逆に人間が自然であるかよう  
に、人間と自然とが一つの共同体として透明に交流している。

このような自然との関係を体得している人々の中に、ソォロウは(2)の途中で提示したカナ  
ダ人の木こりに感じたような主体的「独自性」（アイデンティティ）をみるのである。この  
主体的独自性を持つのが「野性的の人々」であり、ソォロウは彼等を真の文明人、新しい文明  
の創造者とみなしているように思える。

## 注

- (1) Henry David Threau, *Walden and Other Writings of Henry David Thoreau* (New York: The Modern Lidrary, 1950), p. 46.
- (2) *Ibid.*, p. 24.
- (3) *Ibid.*, p. 30.
- (4) *Ibid.*, p. 31.
- (5) *Ibid.*, pp. 11-12.
- (6) たとえば、『ウォールデン』の中の次のような箇所においては, “primitive,” “savage,” “wild” というような言葉はほとんど同じ意味に用いられているように思える。  
I found in myself, and still find, an instinct toward a higher, or, as it is named, spiritual life, as do most men, and another toward a primitive rank and savage one, and I reverence them both. I love the wild not less than the good. (*Ibid.*, p. 189.)
- (7) *Ibid.*, pp. 35-36.
- (8) *Ibid.*, p. 254.
- (9) *Ibid.*, p. 136.
- (10) *Ibid.*, pp. 189-190.
- (11) *Ibid.*, p. 204.

## Summary

## The Complementarity of Science and Savageness

On H. D. Thoreau

by

Kenji TOKIMATSU

There is a certain deficiency to be detected in science, however marvellous its achievements may be. What makes up the deficiency is savageness. Thus, science and savageness are complementary to each other. And, the examination of Thoreau's *Walden* reveals that he considers wildness to be an integral whole of science and savageness.

The wildness is the distinguished quality that all men should develop, the quality necessary for all who earnestly wish to, in Thoreau's words, “make our civilization a blessing.” If we refer as the “wild men” to the men having the wild quality, the “wild men” retain the practical, experiential, intuitional, and immediate relationship to nature.